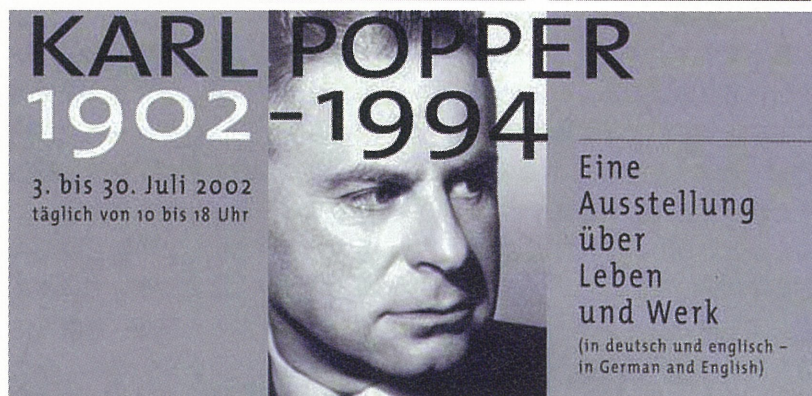


閲覧ニュース

92号

2003.4



「文明人のすすめ」

伊藤俊洋

生物進化の系統を辿ると、ヒトは、今からおよそ500万年前に誕生したといわれています。パスカルは、人間のことを、“考える葦である”と定義しました。デカルトは、“吾おもう故に吾あり”と言ったそうです。この2人の哲人は、人間の特徴を、“考える”という行為に昇華しています。しかし、考えるという行為は、人間だけがもつ特権ではありません。人間以外の哺乳類や昆虫、鳥や魚も考えます。イルカやオオカミは、文明人も舌を巻くような巧妙さで狩りをします。チンパンジーやボノボの社会生活には、人が手本にしたいくなるような優れた生活習慣があります。それでは、このような生物と人間との決定的な違いは何なのでしょう。それは、人間が、考えたことを記録に残す技術を創造したことだと思います。

ヒトは、500万年、いやもっと以前から、自分達の生活を豊かなものにするために、考え続けてきましたが、あるとき、考えたことを言葉で伝えはじめ、さらに、あるときから文字を使って記録に残しはじめたのです。その記録は、古いもので数万年、情報として意味のある最も古い記録はおおよそ1万年くらい前のものです。記録が残りはじめると、それは知識として蓄積され、生命を持った文明へと進化します。人類史上最大の革命は、記録技術の発明である、と断言して良いと思います。この革命は、たかだか1万年の歴史しかありませんが、この文明の担い手は、地球上に止まらず、今やスペースへもその触手を伸ばし始めています。ちなみに、人類が1万年考え続けて蓄積した知識や情報の多くは、何処にあるかというと、それは図書館です。図書館が文明の宝庫なのです。

今からおよそ3500年前のツタンカーメンの遺跡からは、精巧な車輪、椅子、寝台、花瓶、チェス、黄金のマスクなどが出土しています。この時代の最高級の生活必需品の質は、現代の私

達の生活の中でも、十分に通用するレベルを保っています。2300年前の古代ギリシャ時代には、原子論や宇宙論が書物として残されました。この時代に人間の感性はほぼ完成したともいわれています。ギリシャ神話やギリシャ悲劇に、その本質が見て取れます。その時以来、地球上には様々な民族や言語が誕生し、また、国家や宗教の興亡もあり、地球は、様々なボーダーラインで、縦横に切り刻まれて来ました。しかし、ほんのここ20年くらいの間に、地球上の情報の流れは、すっかり様変わりして、いわゆるボーダーレスの時代に入りました。文明社会において、もっとも重要な意味を持つ情報が、高速インターネットで世界中を駆け巡り始めたからです。今、世界は、イラクや北朝鮮をターゲットにして、戦争か平和かで揺れ動いていますが、遅かれ早かれ、このような前時代的構図は消滅していかなければなりません。

スペースに飛び出して、宇宙から地球を眺めてみると、今や地球は巨大なグローバルブレインと化して、66億の頭脳が、高速インターネット上で、ニューロン様ネットワークを構築し、そのネットの中で、個人個人の考えが、刺激しあい、助け合い、協力しあって、より進化した文明を形成しようとする様が見てとれるでしょう。今までに人類が築いてきた様々な文明の集大成、いわば地球文明（global civilization）とでも言ってよい新しいタイプの文明が、築かれつつあります。このグローバルブレインは、まだ未完成のものですが、今後、予想をはるかに上回るスピードで精巧なブレインに進化してゆくものと思います。この新しいシステムには、夢や希望がいっぱい詰まっているように見えますが、実は、誤った情報、危険な情報、破滅への仕掛けも仕組まれています。今までは、国家や公共の組織、企業や団体が、ある程度まで個人の生活を守ってくれました。これからのボーダ

レースの時代には、個人がこれらの危機管理に当たらなければなりません。つまり、私達自身が、細心の注意を払って、このブレインを構成する細胞の1つとして、新しい文明の構築に参画し、何を考え、何を記録に残していくのか、その広がりや奥行きによって、文明人としての質が計られます。

大切なことは、記憶したり、覚えたりすることだけでなく、考えることだと思います。一つのテーマを、考えて、考えて、考え抜く、その習慣を若い時に身につけることが文明人になるための大切なプロセスだと思います。とことん考え抜くという行為には、絶大な集中力が要求されます。エネルギーも使います。周囲には沢山の誘惑があります。現代社会では、自分が考えなくても、周辺の人たちが考えてくれたりします。うっかりすると、何にも考えずに文明社会の恩恵だけを享受して、人生を終わる場合もあります。しかし、それでは、本当の文明人とは言えません。

ここで、20代の前半に、一つのテーマを考えつづけて、科学の栄光を手にした科学者を紹介しましょう。今年は、生物学史上最大の発見だといわれる、DNAの2重らせん構造が解明されて50年になります。発見者の1人であるJ.D.ワトソンは、23才から25才の2年間、明けても暮れてもDNAの三次元立体構造を考え続けて、ワトソン・クリックモデルに辿り着き、ノーベル賞の栄光を手に入れました。二重らせんの発見で、生命現象は分子のレベルで説明できるという確信が得られ、これがその後の分子生物学、バイオテクノロジーの爆発的発展へと繋がっていくのです。その時のワトソンは、まだ定職も無く、米国からイギリス、ケンブリッジのキャベンディッシュ研究所へ移り、ポスドクとして任期制のポストを手に入れました。若干25才の若者が、当時サイエンスの世界では既に高名な巨人であったライナスポーリングとのDNAレースで、何故、勝利を手にすることができたのでしょうか。それは、ワトソンやクリック（当時37才）が、まだ地位も不安定な若い研究者で、朝から晩ま

で研究に没頭できたためだといえます。人間は、年とともに立場や地位が変わり、雑用が増え、集中して一つのことだけを考え続けることができなくなる社会的動物なのです。これは人間社会の一つの悪しき宿命のようなものです。最近はこの宿命を打ち破る人もでてきています。昨年、ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんは、これまで昇進の話があったときに、技術開発に専念したいとの理由で、昇進を断ったと聞いています。自分の信念に従って、新しいタイプの人生を切り開いている好例だと思います。

新入生の諸君は、まだまだ若く、人生は長い長いレースだと思っているかも知れません。しかし、時間はそれほど豊富に残されているわけではありません。物事を、深く、鋭く考え抜く事ができるのは、30代の前半までだと考えて間違いないでしょう。そして、若い時代に、文明人としての必要条件である生活習慣、すなわち物事を深く考え、そのことを記録に残すという習慣を、しっかり身につけておくことが大切です。

ワトソンのDNA発見の物語は、第一級のドラマで、一読の価値があります。講談社の文庫版“二重らせん” ジェームス・D・ワトソン著、江上不二夫・中村桂子訳、英語版“The Double Helix, A Personal Account of the Discovery of the Structure of DNA” James D.Watson, (W.W.Norton)が教養図書館に配架されています。

(基礎科学センター・化学)

図書館からのお知らせ

平成15年度4月1日をもって、図書館のシステムが新しくなりました。図書館の利用については、学生証（IDカード）で対応します。

貸出の時には必ず提示して下さい。また、新システムにより、OPAC検索は北里大学の全図書館が横断検索できるようになりました。

北里大学で所蔵する資料はすべて表示されます。この中からご自分の利用される図書館を選択するシステムです。また、教養図書館のデータも日々更新されますので、今まで以上に便利になります。どうぞ、ご利用下さい。

 右か左か

小 河 原 誠

筆者はカール・ポパー（1902-1994）という哲学者を研究しているので、とりあえず関連する写真でも載せていただいて、今回の責めをふさごうと考えた。で、いろいろ探してみたのだが、これぞというものが見つからない。

言い遅れたが、この哲学者はウィーン生まれで、当時の論理実証主義を批判し、ナチの台頭とともにニュージーランドに亡命。のちにロンドン大学で教鞭をとった。それで、母校ウィーン大学の写真とかニュージーランドで暮らした家の写真とかを考えてみたのだが、とても一般の興味を惹かないだろうと思い直した。また、この哲学者を有名にしたのは、科学の営みは、仮説の実証にあるのではなく（そんなことはできない）、積極的に反証を試みる点にあるのであって、われわれは反証しきれない仮説を暫定的に保持しているに過ぎないという反証主義の哲学なので、それを書いた『科学的発見の論理』（Logik der Forschung, 1934）の表紙も考えてみた。しかし、古ぼけた書物の写真ではありがたみはあまりない。

いろいろ考えたのだが、やはり落ち着くところは顔写真。去年、ウィーン大学で生誕百年記念国際学会が開かれたときに除幕された胸像を撮ってきたので、それも候補になるだろうと考えた。ところが、顔写真を物色している間に変なことに気がついた。同じ一枚のネガからの正常版と裏返し版ではと思われる写真を見つけたのだ。この種の経験がないわけではなかった。私は講談社から『ポパー批判的合理主義』という一般向けの本を出しているのだが、その中国語訳で「裏返し」が生じている。校正がズボラな証拠。もちろん、これはここでの「右か左か」の話とは関係ない。私が見つけたのは、生誕百年記念国際学会のときのネット上でのポスターである。これを見たとき、間違ったのは拙著の方で、結果的に中国語訳は正しい写真を載せたのではないかと思います。愕然とした。だが、落ち着いて当該の写真を表紙にしている書物に当たってみると、やはり私と同じ向きの写真を採用している。少し

安心した。やはり、ポスターを作った人がどこかの段階で間違ったのではないかと思う。

ところで、この写真はポパーの壮年期の写真で、ウィトゲンシュタインとはげしく論争したころの写真である。この論争については最近、『ポパーとウィトゲンシュタインとのあいだで交わされた世上名高い10分間の大激論の謎』（筑摩書房2003年01月）というじつに長たらしい題の翻訳が出た。ウィトゲンシュタインは、思わずかっとなって火かき棒を振り上げたとか。（拙著でも触れているので参照してください。）

ポパーは反証主義でも有名だが、それ以上に「開かれた社会」の哲学者としても有名である。それを述べた『開かれた社会とその敵』（拙訳、未来社）はマルクスをはげしく批判していたので、ポパーは戦後しばらくのあいだ右翼（right）とみなされた。だが、ソ連邦が崩壊してみると、彼が言ったことは正しかった（right）となった。この時点で彼は右から中央に移ったことになる。しかし、世の中の変化は急速で、市場万能主義が幅を利かすようになると、国家による市場への介入を支持するポパーのリベラリズムは左翼の思想となった。いつにまにか、右から左に移ってしまったのである。

もう一度、顔写真を見てほしい。本人は右を向いて写真に撮られているわけだが、見る側は左向きとして受けとめる。ところで、そもそも右向き左向きというのはなにを規準にして決めるのであろうか。本人自身がどちらを向いているかによってだろうか、それとも鑑賞者から見て写っている顔がどちらに傾いているかによってだろうか。これに関して世間で確立された規準があるのかどうか、筆者は知らない。ないような気がする。思想の世界ではますますもって左右判別の規準はないようだ。仮にあったとしても規準そのものがすぐ動いてしまう。戦後思想の変遷のなかで、右翼も左翼もこの哲学者を自分の側に引き寄せ、それを無理やり世間に容認させようとしてきたように思われる。

（哲学）

閲覧ニュース92号

2003.4発行

北里大学教養図書館

〒228-8555 相模原市北里1-15-1

発行責任者 伊藤 俊洋

電話 (042) 778-8005